

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2012年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 コミュニティ福祉学	研究科	コミュニティ福祉学 専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部 教授	松尾哲矢	
研究課題名			
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学研究科 コミュニティ福祉学専攻 博士課程前期課程2年	中山健二郎	
研究期間	2012 年度		
研究経費	100 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

近年日本では、多くのプロスポーツが「地域密着」を理念に掲げて発展を遂げている。プロスポーツに関する研究において、地域社会との関係性を議論することの重要性は、もはや自明のことである。

本研究では、プロスポーツと地域に関する先行研究を検討し、生活者視点の欠如という課題を提起する。さらに生活者の視点からみたプロスポーツの「根づき」の概念およびプロセスを解明し、「根づき」の分析枠組みを構築する。構築した枠組みをもとに調査、分析をおこない、生活者の視点からみたプロスポーツの「根づき」の内実を明らかにすることで、プロスポーツの地域密着についての多面的な理解に寄与することを目指す。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[プロスポーツ] [地域密着] [根づき]

研究成果の概要（図・グラフ等は使用しないこと。）

【先行研究の検討】

プロスポーツと地域社会に関する従来の研究は、スポーツ組織や行政の視点から地域振興効果などを論じているものが大半であった。先行研究の検討より、同領域の研究における生活者視点の欠如という課題が抽出された。この課題を受けて、本研究では松村和則らがおこなった二つの共同研究について、それぞれ詳細に検討した。鹿島地区とサッカーによる開発を題材とした研究（松村ら, 2006）では、外部強制的な性格を帯びたスポーツによる開発と、地域で生活を営む人々の「暮らしの論理」のずれ違いが指摘されていた。また、東北地方におけるレジャー・スポーツによる山村の開発に関する研究（松村ら, 1997）では、外部強制的な性格で進められた開発により生じた諸問題を克服する可能性として、「暮らしの論理」にもとづく「したたかな利用」に焦点が当てられた。上述した二つの研究より、プロスポーツの地域密着について、もともと生活の文脈の外部にあったプロスポーツは、地域の論理にもとづいてしたたかに利用していく生活者の営みによって、地域に「受容」される可能性を持つことが明らかにされた。

【研究目的の策定】

筆者はプロスポーツの地域密着について、松村らが明らかにした生活者による「受容」の先に、「根づき」という状態が存在すると推察した。プロスポーツの「根づき」とは、地域の生活者がプロスポーツを生活の文脈にあって当たり前、無くてはならないものとして、あるいは自らを象徴する存在として認識していることを意味しており、「受容」の状態よりも更に深く地域の生活者に受け入れられた状態と位置づけられる。本研究では、プロスポーツの「根づき」の概念およびプロセスを明らかにすることを目的とした。

【予備調査の実施】

プロスポーツの「根づき」という概念の切り口を看取することを目的として、2012年8月に地域密着型プロスポーツの現場において予備調査を実施した。

〈調査対象〉

プロ野球四国アイランドリーグ 高知ファイティングドッグス球団

〈調査目的〉

プロスポーツの「根づき」についての切り口の看取

〈調査方法〉

球団、自治体、スポンサー企業および試合観戦者に対する参与観察（球団インターンとして）

〈調査期間〉

2012年7月31日～8月10日

〈調査結果〉

プロスポーツへの生活者の意識について、「自分ごと」というキーワードが抽出された。

生活者個人の意識は、地域全体の集合意識（地域の論理）に大きな影響を受けて形づくられていることが確認された。

さらにプロスポーツの組織が、生活者が地域の論理にもとづいて「受容」することを戦略的に利用している面があることが明らかとなった。

研究成果の概要 つづき

【切り口の検討】

予備調査で抽出した「自分ごと」というキーワードをもとに、エドワード・レルフによる場所に関する意識の研究（レルフ, 1991）を検討した。レルフは場所に関する意識の立ち現れ方について「内側性」と「外側性」という考え方をを用いて説明している。人は場所を経験することによって「内側化」し、深い関わりの意識を持つようになるという。プロスポーツを「自分ごと」として捉える生活者の意識も、レルフによる場所の議論と同様に考えることができる。プロスポーツが地域に「根づく」とは、地域の生活者に「内側化」する事であると説明できる。

また、個人の意識と地域の論理の関係性を明らかにするため、アルヴァックスによる「集合的記憶」についての議論を検討した。特定の集団においては、「個人的記憶」の総体として「集合的記憶」が醸成され、「個人的記憶」を補う役割を果たすという。地域の生活者がプロスポーツにもつ「自分ごと」という意識は、地域における「おらが町のチーム」という集合的記憶に補強されているといえる。

【「根づき」の枠組み化】

切り口の検討をもとに、プロスポーツの「根づき」について、「『外側』の状態」、「『受容』の状態」、「『根づき』の状態」の3つの段階に分け、「根づき」の分析枠組みを構築した。プロスポーツは地域の論理にもとづいた生活者のしたたかな利用と、それを利用する戦略によって「『外側』の状態」から「『受容』の状態」、「『根づき』の状態」へと地域に「内側化」していく。「『受容』の状態」では、プロスポーツは生活者に「行動的内側性」のレベルで認識されている。「『根づき』の状態」では、プロスポーツは生活者に「感情的内側性」および「実存的内側性」のレベルで認識されている。また、「『根づき』の状態」では、プロスポーツが生活者の多くに「内側化」されることにより、地域にプロスポーツに関する「集合的記憶」が形成される。

【研究科紀要の投稿】

コミュニティ福祉学研究科紀要第11号において、「プロスポーツの地域密着に関する分析視座—『受容』から『根づき』へ—」と題した論文を投稿し、プロスポーツと地域に関する先行研究の検討と問題提起、プロスポーツの「根づき」の概念およびプロセスの明示、「根づき」の分析枠組みの提示をおこなった。

※ この（様式2）に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書（A4縦型横書き1枚・自由様式）を添付すること。

（様式3）

立教コミ福－院生－報告

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 中山健二郎「プロスポーツの地域密着に関する分析視座—『受容』から『根つき』へ—、コミュニティ福祉学研究科紀要、第11号、2013、pp.79-88